

DRUG

magazine

11

2013
NOVEMBER

毎月1回1日発行

特集 災害医療への薬剤師のかかわりと使命

薬の専門家として 医療チームに 不可欠な存在へ



■総論・解説 ■医師・行政・薬剤師・教育者による特別座談会
■寄稿「薬の不足で実感した患者が抱く恐怖感」

考察 問われる登録販売者のあり方とリアル店舗の可能性——有資格者13万人“漂流”の危局

市販薬ネット販売解禁で揺れる リアル店舗の方向性

否定された？ 有資格者の存在と役割

トップインタビュー 多面的なプロモーションで今期も安定した成長目指す
「魅力ある製品開発はメーカーの使命」
佐藤製薬 代表取締役社長 佐藤誠一氏

インタビュー ふとした会話から広がった世界初のファンディングモデル
初の助成を6件決定、マラリア4件・NTDs1件・結核1件
グローバルヘルス技術振興基金 専務理事/CEO スリングスピーB.T.氏

Close-up 東邦ホールディングス「創立65周年記念祝賀会」開催
濱田社長「全体最適化なくして中計達成なし」
物流と営業の一体改革による成長戦略に決意



薬の不足で実感した 患者が抱く恐怖感

岩手県総合防災訓練における 薬剤師による避難所トリアージ訓練

岩手県薬剤師会 常務理事

中田 義仁

はじめに

東日本大震災の発災後、被災各地における薬剤師の活動が多方面から評価されました。私たちも「震災の経験を今後生かす義務がある」と考えていたところ、釜石市で岩手県総合防災訓練が行われることが決定し、「震災後の経験から訓練内容を検討する必要がある」との思いを持ち、同訓練に参加することを決議いたしました。

本寄稿では、去年ならびに今年行った訓練を通して、薬剤師会として災害に備え、準備すべき活動について報告します。

東日本大震災の 被害と定期薬

2011年3月11日14時46分、大地震が発生し、東日本太平洋沿岸地域は津波のため壊滅的な被害を受けました。

釜石地域（釜石市・大槌町）で

は、約2,500人が命を失い、8,000軒を超える家屋が倒壊いたしました。医療機関も例外ではなく、半数以上が津波の被害を受け（大槌町では医療機関が全てなくなってしまいました）、薬局も22件中13件が被災しました。

東日本大震災は、これまで経験した大きな震災とは異なり、怪我などの外傷性の患者は多くなかったものの、慢性疾患などのために定期的に服用している薬を持たずに避難された方が多く、震災前には考えもしなかった「普段飲んでいる薬がないということが患者様にとって恐怖にも近い感覚である」ということを初めて実感させられました。処方薬は日常生活を支える「安心」であり、その意味でも当地域の災害医療は初めから慢性期医療でありました。

釜石医師会災害対策本部

2011年3月16日、釜石医師会災

害対策本部（以下災対本部）が、医師のみならず歯科医師、薬剤師、保健所・市職員などで構成され設置されました。

最初に行ったことは、「全国からの支援医療班の活動を把握すること」と「支援医療班の統率を取ること」でした。災対本部長は支援医療班の協力を得て、「慢性疾患の患者に今まで服用していた薬を供給すること」ならびに圏内で唯一救急医療を担える「県立病院にストレスをかけないようにすること」に努め、支援医療班、地元医療機関、薬剤師の役割を明確にした指示を出されました。

毎夕5時に、釜石地域で活動する全ての支援医療班が一堂に会する「災対本部ミーティング」が開催され、支援医療班から「診察した患者数」「各避難所の状況」などに関する報告と、本部への要望などを発表することによって、刻一刻と変化する釜石医療圏の医療情

報を入手可能とするスタイルを構築いたしました。

釜石方式

災対本部薬剤師として最初に行ったことは、支援医療班に不足している医薬品を供給することでした。医療活動のほとんどが慢性疾患の医薬品供給となっていることから、支援医療班が必要とする医薬品の供給を始めました。

一方、同活動はあまり効率的ではなかったため、災対本部ミーティングで提案した事案を踏まえて、3月21日から院外処方箋を応需することとなりました。私は18時に薬局に戻って調剤を開始し、避難所ごとに仕分をして災対本部に届け、それを支援医療班が患者に配るという流れで医薬品供給に努めました。

しかしながら、調剤した薬が患者まで届かずに戻ってくるケースが度々あり、「避難所へ行き、服薬指導までできれば……。しかし、地元の薬剤師だけでは対応が難しい」と苦慮していたところ、大阪府薬剤師会が継続的な薬剤師派遣をしてくれることになり、4月7日から実施に至りました。

それからは確実に薬を患者に届けることができるようになり、服薬指導はもちろん、さまざまな相談まで受けられるようになりました。

地域のチーム力

災害医療活動を経験して初めて「薬剤師になってよかった」と思いました。復興に向けて自分がすべきことは、薬剤師の職能を高めることであり、それが地域貢献につながると確信して活動いたしました。

釜石地域は、先達のご尽力により、県内でも三師会がまとまっている地域の1つです。市職員や教

釜石方式

- ① 支援医療班が各避難所を巡回診察して災害処方箋を発行する。
- ② 毎日夕方5時に災対本部ミーティングを開催する。
- ③ 災対本部ミーティングで各医療班から災害処方箋を応需する。
- ④ 災対本部ミーティング終了後、災害処方箋調剤、お薬手帳の発行、調剤薬を避難所ごとに仕分する。
- ⑤ 翌朝、支援薬剤師が避難所を巡回して与薬し、服薬指導を行う。一定期間放置された医薬品の管理を行う。
- ⑥ 災対本部ミーティングで薬剤師が服薬指導内容の報告をする。



災対本部ミーティング

員、介護関係職種にも知り合いが多く、お互い「顔の見える」関係にあります。それが当たり前の日常でしたので、震災前は行政や他職種、住民の方々と連携することがこれほど大切だとは思っていませんでした。しかし、震災後に行政や避難所に行った際、名刺交換の必要もなく、互いに遠慮のない話ができる環境にあることの素晴らしさを肌で感じました。

薬剤師は周りの協力を得ることで職能を発揮できる職種です。そのためにも、薬剤師同士はもちろん、行政や関係職種・団体と常日頃から意思の疎通を図っておくことが重要です。そのような「お付き合い」を心掛けていくことが大切なのです。

岩手県総合防災訓練

2012年9月1日、被災地である釜石市で岩手県総合防災訓練が大規模に開催されました。東日本大震災の経験から訓練場所として初めて避難所が設定され、薬剤師会として4つの項目（釜石市災害対策本部医療班参加訓練、釜石薬剤師会連絡網訓練、避難所での医薬品供給訓練、避難所での衛生管理訓練）について訓練を行いました。

避難所での医薬品供給訓練の概要 目的

「避難者の定期薬を薬剤師が判別すること」と「薬剤師が避難者の定期薬から緊急性の高い薬（薬効が切れるとADLが低下してし

まう薬=すぐに供給しなければならぬ(薬)を抽出する」ことで、医師の診察時間を軽減し、効率よい災害医療提供体制を構築する。

方法

- ①事前に模擬患者へシナリオと医薬品の写真を配布し、演技指導を行う。
- ②行政から「避難所に避難した住民がいつも飲んでる薬がなく困っているので、医薬品の供給に協力して欲しい」との要請により、避難所へ薬剤師派遣。
- ③避難者に声を掛け、「避難所チェックリスト」を用い、確認項目(氏名・年齢・住所・電話番号・疾患名・服用及び使用している医薬品名と残薬の量・お薬手帳の有無)について聞き取りを行って記入。
- ④お薬手帳に薬剤師が聞き取り内容を記入し配布。
- ⑤聞き取り結果から薬剤師の判断で診察に入る優先順位を決め、赤・黄・緑のトリアージカードに聞き取り内容を転記して避難者に渡す。
- ⑥配布したカード(赤→黄→緑)に従い、救護所に誘導。
- ⑦必要な薬を集積所で調達し、救護所に提供。
- ⑧集積所がなく、供給できない薬については「災害用処方箋」を発行してもらい、市内の薬局に持ち込み、調剤してもらう。

避難所衛生管理訓練の概要

目的

水道水が数日使えない避難所が存在した。避難所では衛生管理が非常に重要なことから、感染症の発生を予防、拡大させないために消毒剤希釈方法など、要事の際に行動に移せる薬剤師を育成する。

方法

- ①事前に消毒薬・水・うがい薬・筆記用具などを段ボールに入れて、避難所となる体育館に準備しておく。
- ②行政からの「設置された避難所の衛生管理に協力して欲しい」との要請を受け、避難所へ薬剤師派遣。
- ③段ボールに入っている材料を使って、消毒薬やうがい薬の調製して設置・提供する。

防災訓練の参加結果

特に災害時には、薬剤師として自ら考え・行動することが求められることから、参加した薬剤師には、事前に訓練内容を伝えずに参加してもらいました。

それぞれが与えられた材料と今までの経験で成果を出そうと、必死かつ真剣にチャレンジしている姿が印象的でした。訓練を行うことで、防災意識や日々の薬剤師業務の重要性を再認識したことを素直に言葉にしている感想が多く寄




避難所トリアージ訓練

せられ、有意義な訓練であったことを表していたと思います。

今後の活動

東日本大震災を経験して、災害医療に薬剤師は不可欠な存在であり、薬剤師が関わると関わらないでは、医療の質が大きく変わることが分かりました。

災害は「何時」「何処」で起こるか分かりません。次の災害への備えとして、各地域で防災訓練に参加して活動することは非常に有効です。薬剤師の教育、地域との連携、さらには薬剤師職能のアピールにも繋がりますので、全国に伝達して普及させたいと考えています。同時に、東日本大震災での薬剤師の活動を全国の薬学生に伝え、そこから薬剤師の役割を理解していただき、将来の薬剤師像を描いて欲しいと思っています。



大日本住友製薬

からだ・くらし・すこやかに

大日本住友製薬株式会社
www.ds-pharma.co.jp

